

「学習評価」の充実による教育システムの再構築： みんなで創る「評価の三角形」 (フェイズ2中間シンポジウム報告書)の概要について

1. プロジェクトの目的と報告書の概要

本報告書は、国立教育政策研究所令和2年度教育研究公開シンポジウム「高度情報技術の進展に応じた教育革新～『学習評価』の充実による教育システムの再構築：みんなで創る『評価の三角形』～」の講演録と関連資料をまとめたものである。本シンポジウムは、国立教育政策研究所が実施している「高度情報技術の進展に応じた教育革新に関する研究」プロジェクト（令和元～4年度）のフェイズ2の中間報告を兼ねている。

本プロジェクトは、進展する高度情報技術を学校教育に積極的に取り入れることによって教育革新を推進するための知見を提供することを目的としている。本シンポジウムは、この高度情報技術と教育革新というテーマの下で、令和元年7月のキックオフシンポジウム及び令和2年2月のフェイズ1シンポジウムで確認された「学習評価」の重要性に鑑み、そこどのように高度情報技術が活用できるかという論点を検討することを目的とした。加えて、新型コロナウイルスのためにシンポジウム自体をオンラインで配信する形で行ったように、その影響下でも、子供たちが何を学んでいるのかや、次に何を学びたいのかに関する学習評価の充実を軸に教育システムをいかに再構築していくことができるかを検討した。

本報告書は、その企画趣旨と講演録、示唆・アンケート結果の分析の三章からなる。なお、第1章の趣旨と第3章の示唆・結果分析の箇所については、文部科学省・国立教育政策研究所の組織的な見解を示すものではなく、本プロジェクトとして見解であることに留意されたい。また、登壇者の発表スライドについては、本報告書アップロード時のファイルサイズを小さくすることを優先し、画像の解像度を下げたため、既に公開されているシンポジウムのWebページとリンクすることで、スライドの内容を確認できるようにした。あわせて、ご参照いただきたい。(キックオフシンポジウム、フェイズ1シンポジウムの報告書もウェブサイト上にアップロードしている)。

【研究期間：令和元～4年度，研究代表者：藤原文雄（初等中等教育研究部長）】

2. 各章の要旨

第1章では、プログラムの概要と、これまでのシンポジウムで扱った論点と本シンポジウムのテーマ設定の経緯を紹介した。教育と学びの本質を探る必要性を主張する立場、情報技術の可能性を主張する立場、情報基盤の必要性を主張する立場という三つの立場が融合して、質の高い実践をより大規模に行うことが重要であり、そのために、実践についてその前提となる学習理論や仮説に照らして検証する「学習評価」をテーマとして設定した。そこに高度情報技術がどう活用できるかを議論することで、上記三つの立場を融合することも狙った。

第2章では、本研究所長の挨拶、文部科学省教育行政関係者による学習評価を巡る高度情報技術の可能性や必要性についてのディスカッション、米国National Research Councilのレポート“Knowing what students know”を基に、評価を「認知モデルに基づいて観察したデータの解釈過程」だと見なす「評価の三角形」を解説したイリノイ大学シカゴ校James Pellegrino特別教授の基調講演、聖心女子大学益川弘如教授・(独) 大学入試センター寺尾尚大助教・東京大学齊藤萌木特任助教による基調講演解題のためのパネルディスカッション、国立情報学研究所喜連川優所長、九州大学安浦寛人理事・副学長、上智大学奈須正裕教授、本研究所上野耕史教育課程調査官(併) 視学官及び白水始総括研究官による「学習環境のデザインと評価を支えるテクノロジー」に関するビジョナリートーク、そして東北大学堀田龍也教授の全体コメント、本研究所次長の閉会挨拶の講演録を掲載した。

第3章では、第2章の講演録の振り返り、アンケートの結果分析に加え、シンポジウム後にコミュニケーションツールで行った登壇者と参加者間の質疑応答も掲載した。以上を踏まえ、学習評価の充実による教育革新に向けた論点を整理した下図のモデルを掲載した。

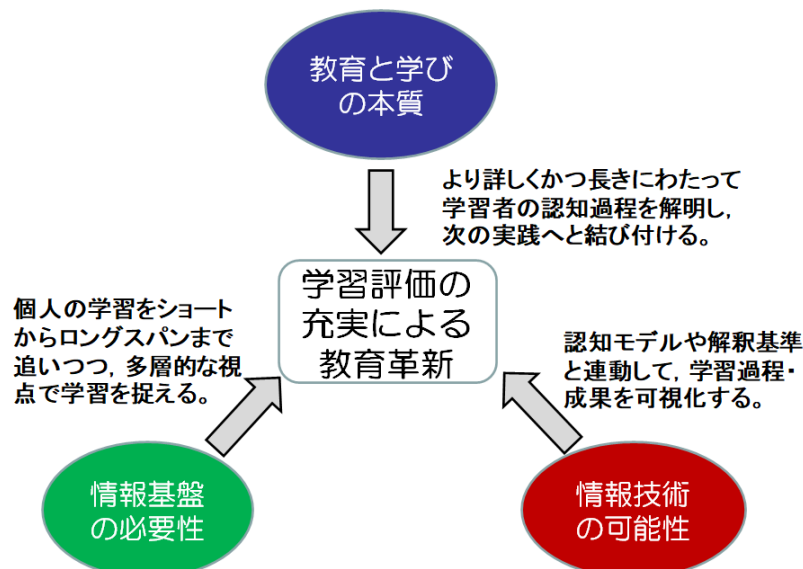


図. 学習評価の充実による教育革新に向けた整理